

「まち全体が歴史の物語の中にあること」。この言葉は富士吉田市の上吉田で開催させていただいたまちづくりワークショップの会場にて、「地域の何を誇りに思いますか」という質問に対する地域の方からの回答の一つとして寄せられたものです。

# 時標

上吉田は富士山信仰の拠点であった御師まちを抱えています。特徴的な町割り、世界文化遺産の構成資産でもある御師住宅が今も残り、北口本宮富士浅間神社や晩夏の火祭り長い歴史を感じさせます。私は先の言葉に、そうしたまちが今もなお歴史の中に

あるということ、つまり、この地域で暮らす現代の人たちもまた、歴史の物語を生きているのだということに気づかれました。歴史は過ぎ去ってはいない。今も続いている。今もその中にいる。地域の方々はそのことを誇りに思っています。私に聞きました。

私が上吉田に通い始めたのは、富士吉田駅の富士山駅への改称(2011年7月)の直後からです。富士吉田市と慶応大学との連携協定のもと、御師まちの観光まちづくり、国道拡幅に伴う周辺地域のまちづくりに関する調査や社会実験を行ってきました。地域の歴史をどう捉えて、今後のまちづくりにどう生かしていくのか、が重要な課題だと考えてきました。その問題意識に対して、先の言葉がヒントを与えてくれました。

## 歴史の物語 紡ぐまちづくりを

文芸評論家の千野帽子は、人間は世界を「時間と個性のなかで理解するための枠組み」で捉える動物であると指摘しています。「人はなぜ物語を求めるのか、ちくまプリマ



中島 直人  
東京大  
大学院准教授

新書、2017年。物語とはそうした見方の表れの一つです。つまり、「歴史の物語」

とは、こうした見方に基づいて、ものごとの来歴を紡いだ表現ということになります。まちづくりの始まりは、自分たちの地域を知ることです。その際の手がかりが歴史であることは論を待ちません。が、単に地域の歴史を過去の事実として知るにとどまらず

に、過去から現在までをつなげる一つの物語として捉えること、そして、自分たちの将来に向けた取り組みがその物語の続きを担うということへの理解が求められます。歴史が息づくまちは、過去、現在、そして未来が連鎖する時間軸を備えたまちです。まちづくりにとっては、「歴史」

以上に、より能動的な「歴史の物語」が重要なのです。今年の夏に、上吉田の国道138号線沿いの旧郵便局の建物をDIYでリノベーションする機会を得ました。この建物は国道の拡幅で将来的には取り壊されるであろう築50年超の建物です。20年前に郵便局は転出して、長らく空き家でした。私たちの調査研究活動に共感して下さったオーナーのご厚意で借りることができた旧郵便局は、まちづくりのためのギャラリーに生まれ変わりました。まちの郵便局として親しまれた記憶の継承とともに、地域のまちづくりの現状やビジョンの発信拠点、拡幅後の沿道に期待される機能の実験空間としての役割が与えられたのです。取り壊しという未来が先にある建物です。しかし、新しい物語が、その決められた未来と過去、そして現在をつなげようとしています。「歴史の物語」の中にあるのは、何も特別な地域だけではありません。どんな地域も一朝一夕でできたわけではありませんが、必ず現在、そしてあらゆる可能性としての未来を持っていきます。それらを丁寧にほぐし、物語を編んでいく。成熟した社会における都市デザインとは、時間の編集デザインのことなのです。

なかじま・なおとさん

1976年東京都生まれ。東京大卒、同大大学院修士課程修了。博士(工学)。東京大助手、助教、慶応大専任講師、准教授を経て現職。専門は都市計画、都市デザイン。近著に「都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート」。